

新渡戸ワールドを身近に——

新渡戸稲造 の世界



一般財団法人 **新渡戸基金**

第31号 2022

「新渡戸稲造と上代タノ

—普連土学園との不思議な縁」大津 光男

「札幌遠友夜学校第三代校長半澤洵先生」堀田 国元

「新渡戸稲造と二宮尊徳」加藤 誠之

「新渡戸稲造博士に聞く

—一九一九年～一九二〇年」菅野 貢輝

「卒後五十年に思うこと」松沢 幸一

新渡戸稲造の世界

第31号

2022

財団法人 **新渡戸基金**



新渡戸稲造の世界

論文

札幌遠友夜学校第三代校長半澤洵先生

一般財団法人機能水研究振興財団理事長 堀田 国元

一、はじめに

新渡戸稲造ご夫妻によつて一八九四年（明治27年）一月に設立された札幌遠友夜学校（以下、遠友夜学校）は一九四四年（昭和19年）に閉校となるまで五十年に及ぶ活動の歴史を刻んだ。それは、札幌農学校生のボランティア協力を得て、貧児や晩学者のために無償で実践教育を行った北海道初の社会福祉活動であった。遠友夜学校では、新渡戸稲造（以下、新渡戸）が終身校長として位置づけられていたが、過労により体調を崩し、療養のためにメリー夫人とともに札幌を離れた（一八九七年）後は、新渡戸の理想を受け継いだ人たちが代表を立てて運営に当たった。新渡戸の逝去（一九三三年一〇月カナダ）後に校長に就いたメリー夫人が逝去（一九三八年九月駐弁沢）されると、創設時から遠友夜学校の活動に携わり、長く（一九二二年「大正一〇年」）代表を務めていた半澤洵代表が第三代校長（代表も兼任）に選任された（当時六十歳）。半澤校長は、義務教育の浸透による入学生徒の減少や軍事色など時代の

波に翻弄されながらも遠友会の人びととともに新渡戸の理想を守り、力尽きて閉校するまで遠友夜学校の運営を続けた。

半澤先生は、一八九二年に札幌農学校予科に入学し、その前年に帰国し教授を務めていた新渡戸による直接教育を五年に亘つて受け、遠友夜学校設立とともにボランティア教師となった。一方で、一九〇一年に札幌農学校（第一九期生）を卒業すると遠友夜学校初代代表であった宮部金吾教授の下で研究の道を進み、先進微生物学を学んだ欧州留学を経て農科大学農芸化学科に一九一五年に新設された応用菌学講座の初代教授に就任し、昭和16年（一九四一年）に退かれるまで応用微生物学の研究を展開された。「納豆博士」と綽名されたように、一般的に最も有名な研究業績は衛生的納豆製造法の確立であるが、その普及が進んだ頃から遠友夜学校の運営責任を担うようになった（表1参照）。

本稿ではこれらを踏まえて半澤先生の活動や人となりについてアプローチしてみたい。筆者（昭和19年生）は、半澤先生の後を継いで応用菌学講座の第二代教授とられた佐々木西二先生（遠友夜学校の元教師で、校章と校旗をデザイン）の薫陶を受けた。いわば半澤先生の孫弟子に当るひとりである。

二、生い立ちと札幌農学校第一九期生

半澤洵は、明治12年（一八七九年）一月九日、伊達白石藩士半澤時中の長男として札幌の白石村で生まれた。明治17年に札幌創成小学校に入学し、明治25年（一八九二年）に高等科四年を卒業後、札幌農学校の子科に入学した。そして、予科五年、本科四年の課程を終えて明治34（一九〇一）年七月に第一

は札幌独立基督教会で受洗したのだが、半澤はクリスチャンの集いに顔を出していたものの受洗することはなかった。ともあれ、彼らの友情は固く、半澤は特に有島と親友であった(写真1参照)。感受性の強い年ごろ(十代後半)の彼らにとって、米・独で学んだ先進的な知識や経験をもち、フレンド派クエーカー教徒となつてメリー夫人とともに帰国して教授に就任した新進気鋭の新渡戸(三十歳頃)による熱心な全人教育は、人生の歩みを方向付ける大きな指針に他ならなかったであろう。



(写真1) 札幌農学校予科卒業記念 (1897年)

九期生として卒業した。同期生は三十四名であつたが、そのうちの実に十一名が遠友夜学校の教師を務めた。さらに有島武郎(第三代)、蠣崎知二郎(第四代)、半澤洵(第七代)の三名が遠友夜学校の代表を務めた。三人の任期を推算すると三十年を超え、実に遠友夜学校の歴史の三分の二に及んでいる。新渡戸が札幌を離れてから二度(〇九年と三二年)来校したときの代表を務めていたのは有島と半澤であつた。また、新渡戸に心酔し、長じて東京において女子経済専門学校(現新渡戸文学園・初代校長は新渡戸)を設立した森本厚吉も第一九期生であつた。彼らのほとんど

年	札幌農学校・北海道大学	年	札幌遠友夜学校
1891/M24	新渡戸稲造教授就任	1894/M27	新渡戸夫妻設立(1月)、半澤教師
92/M25	札幌農学校予科入学(97年予科卒業)	97/M30	新渡戸校長夫妻離札(10月)初代表:宮部金吾(M30~37)
1901/M34	札幌農学校本科卒業(第19期生)		
02/M35	宮部金吾研究室・助教授	98/M31	有島武郎:校歌作詞作曲 遠友夜学会発足(約100名)
04/M37	伝染病研究所留学(北里柴三郎・志賀潔)		
07/M40	東北帝国大学農科大学となる。「応用歯学」開講	99/M32	第1回卒業生
10/M43	「雑草学」出版	1905/M38	第2代表:大島金太郎(M38~41)
11/M44	欧州留学(12月)	09/M42	第3代表:有島武郎(M42~T3)新渡戸校長来訪
12/M45	独Wehmer教授:Rhizopus delmar研究 仏バストゥール研究所 Bertrand教授		
14/T3	独 Löhns教授:Azotobacter研究	14/T3	第4代表:蠣崎知二郎(T3~8)
15/T4	帰国:農学博士(クモノスカビ属の研究) 東北帝国大学農科大学農芸化学科 応用歯学講座 初代教授	19/T8	第5代表:野中時雄(T8~9)
		20/T9	第6代表:小谷武治(T9~10)
18/T7	北海道帝国大学となる。 衛生的納豆製造法確立(→納豆博士と紳名)	21/T10	第7代表:半澤洵(T10~S19)
		23/T12	財団法人化(理事:新渡戸・宮部・三島・半澤)
41/S16	定年退官(→第2代教授:佐々木西二) 北海道帝国大学名誉教授	28/S3	35周年記念式
		29/S4	校章制定
		31/S6	新渡戸校長来訪
47/S22	北海道大学となる。	33/S8	新渡戸校長逝去(10月)・選葬式
58/S33	藍綬褒章受章、北海道文化賞受賞	38/S13	新渡戸メリー校長逝去(9月)
69/S44	日本学士院会員 第1回北海道開発功労賞(学術科学)受賞	39/S14	半澤代表第3代校長就任
		43/S18	創立50周年記念式典(6月)
71/S46	昭和天皇陛下に御進講:納豆	44/S19	閉校(3月)
72/S47	逝去(93歳)	79/S54	新渡戸夫妻顕彰碑建立・除幕式
		94/H6	創立百年記念講演会
		2013/H25	(一社)新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会 設立

(表1) 札幌農学校・北海道大学および遠友夜学校における半澤洵先生関連出来事

彼らが、男尊女卑の世の中において男女差別なく貧児や晩学者を教育することの意義深さを説く新渡戸の教えに共鳴し、進んで遠友夜学校のボランティア教師に志願したことは容易に想像できる。彼らにとつて札幌農学校と遠友夜学校を通じて五年（一八九二―一九七九）にわたる新渡戸との濃密な時間は人生航路における何物にも替え難い貴重な精神的財産をもたらしたのであろう。

新渡戸の教えは半澤の心にしつかりと根付き、新渡戸が離札した（明治30年―一八九七年）後も遠友夜学校への奉仕を迷うことなく続け、欧州留学のときを除いて閉校までの間五十年にわたり献身した。

三、研究者としての足跡

表1に要約したが、半澤先生は一九〇一年七月に札幌農学校を卒業すると、宮部金吾教授研究室において植物学を修め、翌年には農学博士の学位を取得して助教となつた。〇四年には北里研究所（北里柴三郎所長）に留学して細菌学を学び、赤痢菌の発見で有名な志賀潔博士の知遇を得た。帰学後、応用菌学を開講（〇七年）し、一〇年には「雑草学」を刊行した（三十一歳）。この本は類を見ない本として高く評価された。当時、遠友夜学校代表であつた親友の有島武郎は、翌年刊行の著作「同級生」に、「諸君は坊ちゃん（半澤のこと）の雑草学と云う本を讀んだことがあるか、…（中略）…あれは坊ちゃんが植物學に永遠の訣別をする記念の出版で…」と書き記している。

この年の暮れに半澤先生は欧州留学に出発し、フランスのバストゥール研究所（ベルトラン所長）、ドイツのハノーヴァー高等工業校（ヴェーマー教授）およびベルリン大学（レーニス教授）において微生物学を学んだ。帰国（一九一四年）した翌年、農芸化学科に新設された「応用菌学講座」の初代教授に就任し、有名な衛生的納豆製造法の開発をはじめとして、各種の研究を展開された。

半澤先生の研究業績は高く評価され、一九五八年（昭和33年）に北海道文化賞、六九年（昭和44年）には応用菌学の創始と社会福祉事業の推進により第一回北海道開発功労賞（学術・科学部門）を受賞している。同年さらに、日本の醗酵学の権威である坂口謹一郎東京大学名誉教授の尽力により日本の科学者の最高峰である日本学士院会員に推挙され、七一年には昭和天皇陛下に納豆について御進講された。

（一）半澤研究室（応用菌学講座）の様子（佐々木西二先生の遺稿手記より）
 応用菌学講座において学生時代を過ごし、半澤先生退官後に第二代教授となつた佐々木西二先生（昭和6年卒）は、学生の頃の応用菌学講座について以下のように手記されている。この手記は佐々木先生の次男、民彦氏より提供いただいた。

「半澤先生は農芸化学の中で最も年をとつた先生であつた。元々、生物学科の出身で宮部先生の直弟子として植物病理学をやられた。大正4年に応用菌学という日本にない講座を始められた、化学専攻の先生ではない変り種である。わら苞に入れてつくる非衛生的な庶民の食品であつた納豆を納豆菌というバクテリアを用いて衛生的にきれいな容器の中で病気になる惧れのない納豆製造法を拡めてい

育するという有名な新渡戸稲造先生が満里子夫人と始められた夜学校を熱心に守って居られることを知り、また先生の妹さんが日本画家の平沼深雪さんであるし、姪御さんが「時計台の鐘」という唄の作詞作曲をした高階哲夫さんの夫人(マスさん)であることなど、そして何よりも先生の温和で慈愛深いお人柄に引かれ、応用菌学講座に所属して半澤先生の御指導を得ようと決めた。

半澤先生は西二に「嫌気土壌の微生物学的研究」というテーマを下さった。…(中略)…そして、「この本を一週間以内に読んで参考にして方針を建てなさい」と一冊の別刷を渡された。見ると全然習ったことのないフランス語である。「習ったことがないので読めませんが」と云うと先生は、「君、英語とドイツ語習ったんだらう、アルファベットを知ってるなら辞書引けるだらう」と取りつく島もなかった。別刷を先生からお借りして一週間以内に読まねばならないことになった。…(中略)…これは、マダムクローヴィンという婦人の学者がパストゥール研究所で書いた学位論文であった。后からお聞きしたのであるが、半澤先生は英語をほとんど習わぬ小学高等科から札幌農学校に入られたので、外人教師による英語授業に大変苦労されたということであった。西二にフランス語で同様の経験をさせたものと思われる。そして、この論文別刷は先生がパストゥール研究所に留学された時、マダムクローヴィンから直接贈呈されたものという真に記念すべきものであった。

半澤先生はパストゥール研究所で初めての日本人留学生であった。当時のベルトラン(Berland)所長夫妻の下でベルトラン先生が創案し、世界中で評判になっていた糖分定量の新しい方法、即ち、ベルトラン法を手をとるように学ばれたのであった。引き続き、ドイツのハノーヴァー高等工業学校でヴェーマー(Wehner)先生に就いてかびの研究を修業され、アミロ法アルコール醗酵の有用菌

の新種として今日も最も重視されているリゾープス・デレマール *Rhizopus Delenar* を分離し新種として命名発表された。次いでベルリン大学レーニス(Lohnis)先生の所で土壤細菌の窒素固定菌 *Azotobacter* 属について研究された。…(中略)…応用菌学講座の建物は農学講堂から独立してつくられたスマートでモダンな新築講堂であった。半澤先生は昼食のとき教室員と講座の図書室で大きなテーブルを囲んで食事を探る習慣になって居た。西二もその片隅に加えられたが、その時間中いろいろな問題について会話がかわされ大変為になったことが多い。参考とする図書は周囲の壁を埋めているし、時には厳しく時にはなごやかに討論や問答があり、これが本当のセミナーだなど思った。この外に週一回、教室の全員によるセミナーがあり、各自勉強した新刊の外国雑誌の論文の紹介を交代でやるのだが、必ず先生が中心で遠慮なく皆から質問や意見が出るので若い西二などは一刻もボヤツとして居れず、本当に学問的にも人間的にも鍛えられたものである。」

〈筆者注〉

上記の二つの微生物に関する研究報告は、S. Wakeman 著「土壤微生物学原理(一九二七年刊)」に取り上げられている。Wakeman 博士は、土壤微生物の一種である放線菌より抗結核薬のストレプトマイシンを発見(一九四四年)し、ノーベル賞を受賞した(一九五二年)。

また、「図書室の周囲の壁を図書が埋めている」という光景は、講座が農学部本館に移った後も応用菌学講座の教授室の壁に再現されていたことを大学院生として在籍していた筆者の記憶に残っている。加えて、半澤先生の胸像が置かれていた(今は農学部玄関の階段踊り場にある)。

四、遠友夜学校の代表・校長当時

(一) 応用蘭学講座の遠友夜学校生

佐々木酉二先生が遠友夜学校の教師をしていた頃、二人の中等部に通う生徒が半澤先生の計らいで応用蘭学講座で働いていた。そのうちの一人(大坊亥之助氏)が中心となって遠友夜学校の校章と校旗をつくろうということになり、デザインを募集したところ佐々木先生のもが選定された。校章は昭和四年に制定、校旗は昭和五年三月の中等部卒業生によって寄贈され、遠友夜学校のシンボルとして各種式典に使用された。校章は、遠友夜学校跡地に整備された新渡戸稲造記念公園にある新渡戸夫妻顕彰碑の青年像の胸に織込まれている。校章と校旗については『新渡戸稲造の世界』第二十九号の筆者拙文を参照いただきたい。

(二) 元在校生の思い:田中正治氏(昭和5~9年在校)

「遠友夜学校」に掲載された「六キロの砂利道」を以下に転載する。

「遠友夜学校で出会った多くの人々は忘れることが出来ません。ことに、代表校長だった半澤洵先生のことは忘れることが出来ません。半澤先生はお忙しいにもかかわらず、片時も忘れず来校され、私どもに訓話されました。訓話は、言葉が明瞭なうえ気高さが感じられ、感動させずにはおきませんでした。

中等部四年に進級した春、私は図書部長を任せられました。読書室には、先生方が夜学校を去られ

る時に寄贈されていた本が数多くあり、二千余冊の蔵書がありました。また、この年、新しく大型読書机もおかれましたが、この読書室は少し殺風景で寂しい感じがしていました。しかし、ある日半澤先生が読書室に來られ筆をとって、半切紙に「静肅」と書かれ、二枚に捺印し、そのうちの一枚を「あなたに」と私に手渡された。半澤先生の臨書を手にした私は嬉しくてたまりませんでした。と同時に、読書室はこの「静肅」の扁額が飾らただけで見違えるようになったのです。

また、中等部四年の第三学期は、期末試験も頑張らなければなりません。立看板やポスター等を作り、それを市街の要所に立て、新入生徒の募集を行いました。生徒が生徒の募集を行う、これこそが働きながら学ぶ遠友夜学校の精神でした。

昭和九年、この遠友夜学校を卒業する時がやって来ました。卒業証書を、そしてその年はただ一人の精勤賞を、直接半澤先生よりいただいた時には、六キロの砂利道を雨の日も風の日も通ったことがいっぺんに報われた思いと同時に、遠友夜学校に学んだという誇りで胸がいっぱいになりました。

最後に、私が在学中、新渡戸稲造先生が来校されるという幸運に浴したことを思い出します。昭和六年五月、夕陽が沈むころ、私どもは紅白の幕を張って新渡戸博士を出迎えました。やがて車が正門前に停まり、半澤先生が先導されて降りて来られました。新渡戸博士の訓話を感無量の思いで拝聴し、そして記念撮影を終え、先生は去られました。それが新渡戸博士最後の来校とは思ってもありませんでした。博士の揮毫された二枚の扁額「学問より実行」と「With malice toward none. With charity for all.」は今もなお、遠友夜学校跡に建てられた中央勤労青少年ホームの新渡戸記念室に保存されています。」

(三) 新渡戸校長の言葉

新渡戸校長は二度目の来校の際に教師、生徒、関係者を前に講話を行った。その中で以下のように半澤代表に言及された。「…此の學校を始めるに當り先生を頼んだ。學問の出来る人のみを頼んだのではない。友達になれる人―遠友になれる人、子供を可愛がる人、畢竟人と会って明るい気持ちで親切にして呉れる人を頼んだ。だから遠友夜學校に来て居た人は立身する。萬事私に代わって代表をして下さった人は何んと偉い人ではありませんか。近頃は専ら半澤先生が色々の事をして下さる。教育は物を覺えることよりも立派な人だとされる方が後々の成功も確かだ。…」

この頃の遠友夜学校は生徒数も多く、もつとも活発に活動していた時代であった。

(四) 新渡戸校長への思い

『新渡戸博士追悼集』(昭和11年・一九三六年)に掲載された「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」と題した半澤代表の追悼文から引用する。

「…主として本校の経営に當った大島金太郎、有島武郎、蠣崎知次郎、野中時雄、小谷武治並びに筆者等は何れも直接博士の薫陶を受けたもので、博士の本校設立の精神を体し是が具現に努めて来たが、教師として集った学生は何れも博士の徳風を慕ひ、博士の精神に共鳴しその事業の一部に参加する光栄と喜びとを感ずる者のみで、何らの報酬なきにかかはらず多忙なる勉学の傍ら熱心、その授業に、その経営に當って倦まず、その中に又自らの人格を陶冶し、啻に教へるのみならず、自らも教へられて、各方面に散り、本校にて養ひ得た精神の發揮に努めて居る。…(中略)…上述の様な本校の

事業の發展は勿論、…(中略)…其の趣旨に賛して之が維持發達に努力した多くの人々の力に負う所が多いのであるが、その創立者であり又校長として一生此に力を致された博士の人格のあるに非ざれば到底今日の結果を望み得なかつたであらう。実に本校は博士の精神の具現であった。…(中略)…其は博士が今日札幌に残された唯一の事業であり、その形は非常に小さいものではあるが、其が博士の理想の一部であり、その人格の具体化である事を憶つて、私等幸ひこの事業の一部を担当する事を許されたものは、その創立の精神の貫徹に微力を致したいと願つて居る。」

(五) 第三代校長就任に当たつての所信

遠友夜学校の運営が困難さを増す時代状況の中、逝去された第二代校長のメリー夫人の後任として校長に就任された半澤先生が述べられた所信「校長就任に當りて」(遠友二四号・昭和14年二月)を以下に転載する。

「先日一七日、本財團役員會の御選任に依りまして不肖私がこの遠友夜学校の第三代校長たる光榮に浴し、此處に御一同の御參會を機とし、就任の御挨拶を述べる事の出来ましたことは私の最も欣幸に存する次第であります。

思ふに本校は、御承知の如く、彼の慶應義塾大學の創設者福澤諭吉先生と並んで、明治の二大教育者、思想家と稱され、我國の文化に大きな足跡を残された新渡戸稻造先生が明治27年札幌農學校に御在學中、學生有志と共に開設せられましたもので、唯に其の歴史に於て、本道に於ける最古の社會事業の一であるのみでなく、その精神に於て、其の業績に於て、我邦に於ても最も特異な事業として識

者の注目を引いて居るのであります。

而して其の設立の動機は新渡戸先生の博い人類愛から發する社會理想であり、之も可能ならしめたものは萬里子夫人の夫に對する深い理解と、夫人の人格を育んだエルキントン家の深い人類愛の賜であつたのであります。故に新渡戸先生を校長と仰ぎ、その御逝去の後は萬里子夫人を校長と仰いだのは當然でありまして私共は名實共に、世界に誇るべき名校長を戴いて居たのであります。所が御兩人が長逝せられました後、其の後を如何にすべきかは此事業に關係持ちます者御一同が心配して居た事で、新渡戸家と特に關係深く且つ夜學校には設立當初から深い關係を御持ちになつた宮部先生を推戴致そうと努力しましたが、先生は御謙讓によりどうしても御受けして下さらず、不肖私が選任され、その重責を負わされる事になりました。不徳の私が果たして其の任に耐え得ますかどうかは非常に疑問とする處でありまして、再三御辭退致しましたが御許しがなく、熟考を重ねました結果遂に御引受することになりました。素より名校長を戴いて其の徳の下に一致して事に當つたとは異なり、將來一層皆様の御協力を得て此大任を無事に果たしたいと存じますので、此處に聊か私の本校経営の方針に對する考を披露致しましてご賛成を願ふ次第であります。

▽遠友夜学校経営方針

設立者新渡戸夫妻の精神を受け継ぎ其の特徴を生かし、其の設立の使命の達成に向かつて邁進する事であり、本校の目的は貧兒並晩學者に無月謝にて普通教育を授けることであります。

然るに本校の教師は設立當初より札幌農學校生徒の有志より選任し、今日尚北海道帝國大學學生徒

中の有志の篤志に基き、校長以下の役員も大學の關係者にして全部本務の側ら、犠牲的奉仕を以て基經營に従事し専任者なるものがないのであります。

斯かる組織に依つて夜學校は經濟的に恵まれ、最小の經費を以て比較的大きな事業を遂行し又人的要素に恵まれ、最も優秀且つ熱心な教師を絶えず得ることが出来、教育事業、社會事業に最も必要な精神的要素に恵まれて居る。即ち團體生活に最も必要な犠牲的精神を中心として結成されて居るが故に結合は固く、教育上にも他の組織では持ち得ない精神的要素を持つてゐるのであります。

然し此の組織の欠陥は何れも本務の餘暇に行ふものでありますから事業の種類並に自ら制限のある事であります。即ち事業の種類に於ても本務に支障を來すものであつてはならない。即ち學生々徒が勉強の側ら餘暇を利用し、大して肉體的、精神的負擔を感ぜざる程度のものでなくてはならぬ、慾を言へば勉學修養に益するものたる事を最大とする。

經營事務も亦、出來得る限り擔任者の負擔とならぬ様に考へねばならない、此の意味に於て現在の本校の目的は最も其の當を得たものと思ふのであります。

然し此の目的は設立當初とは社會的重要性が著しく異なつて來たのであります。普通教育制度が次第に完備し、教育機關が普及して、普通教育を受けない貧兒晩學者が次第に尠くなり、又其の組織の上からは教育機關としての體系を備へる事が困難なため、卒業生に資格を與へ得ないといふこの二つの原因により生徒は次第に減じつつあります。

即ち、義務教育の普及殊に夜間小學校の設立は今日の初等部の人員を減少し、初等教育の再教育の如き有様となり、遂に中心を中等部に移すの止むなきに至り、更に中等部も亦夜間中學校の設立によ

り次第にその方に生徒を吸収され、今や青年學校の義務化により男生徒の大部分を失わんとしつつある。今又社會事業なるものが次第に内容を変へ來り、貧兒教育の如きは之を教育機關に譲るべく社會事業としての價値は漸時低くなりつつあるのであります。

此處に於て夜學校はその目的を変へて社會事業として、他の時代の要求する事業に轉ずるか又は教育の對象を、例へば女子教育、成人教育、庶民教育等未だ教育機關の行亘らざる方向に轉ずるの途をとるか、或は又全く組織を換へて教育機關としての體系を整へて、例へば青年學校となるか、然らざれば、現状の儘で規模を小さくするか、その何れか一を選ばなければならぬのであります。

然し乍ら、所謂資格を有する學校に改組する事は恐らく社會事業としての性質を失ひ、現在の組織では不可能なるのみならずその特徴を失ふ事にもなるのでありまして、所詮採るべき途は次の二つであらうと思ひます。

即ち、その一は教育の對象を替へる事であり、他は専任者を設置して他の社會事業を經營せしめ、夜學校は塾式の昔に歸るとも從來の通り、經營し續ける事であります。

然し斯る變化は熟考を要し、今日二、三の案は持つて居りますが、未だ實現の自信を持つに至りません。故に夜學校は従來通りの目的と組織によつて遂行し、その變改は今後の宿題として諸氏の共に熟考下さらん事を希望致します。

然し乍ら斯る状態になつても夜學校の必要は失はれるものではなく、たとへ青年學校の義務化が行はれようと當分の内は夫れに漏れるもののあるべきことは小學校が普及しても初等部の生徒の急激な減少を見なかつた例の如く、若し經濟的原因により青年學校に入學し得ぬものがあれば之を收容す

ることとし、その卒業生は青年學校卒業と同様の資格ある如くする様務めると共に、他方に於ては女子青年、晚學者、朝鮮人、其の他青年學校入學義務者以外の者で教育を要するもののあるべき故、これらの教育に當り完備され、法規によつて教育方法の一定されたる教育機關とは種々の異なる特徴あるを以て、例へば教育選擇の自由、個人個人に立ち入つた全的教育、自治的訓練等が擧げられます。これらを活かすことにより、夜學校本来の目的に向つて進み得ると考へるのであります。

最後に夜學校の教育方針を述べますれば、

- (一) 教育勅語の主旨を奉體し、忠良なる國民を養成すること。
 - (二) 其の具體化としては、新渡戸先生の遺訓を用ふること(例一日一言)。
 - (三) 新渡戸夫妻の人格を龜鑑とすること。
 - (四) 學者よりも實行家を作ること。
 - (五) 智育よりも徳育に重點を置くこと。
 - (六) 教師、生徒共に犠牲的精神を發揚し、責任ある社會人たるべく努力すること。であり、以上の方針實行のために教師諸君に望みますることは、
- (一) 唯に講壇に立つて智識の切實をするが如き事なく、生徒の日常にも親しみ、又經營事務の遂行にも努力せられたきこと。
 - (二) 月次會は夜學校事務遂行上極めて重要な行事でありますから、出来得る限り出席して忌憚なき意見を交換し、常に夜學校の将来につき研究せられたきこと。

(三) 遠友寮は特に事務的方面に盡力せられる方々の便宜を圖って設けられたものでありますから、寮を利用せられる方は夜学校事務の中心となつて、協同一致事に當られ、唯々寮を利用される方のみならず、それ以外の人々も充分援助せられんこと。

以上であります。要するに夜学校の事業は、事業こそ小さいものでありますが、極めて重大な任務を持つものでありますから、教師たる諸君は修養道場として常に人格の陶冶に努められ又その組織より、経営も事業もすべて教師諸君の双肩にあることを自覚せられ教育、事務共に教師たるものの責任なりと考へられんことを切望して止まぬものであります。」

(六) 閉校に関する思い

大正十年六月から代表者となり、財団法人理事、第三代校長として実に五〇年遠友夜学校のために尽くされた半澤先生は、以下のように閉校を振返っている（「遠友夜学校」より）。

「周囲の事情で止むを得なかつたとはいへ、新渡戸先生が札幌に残されたただ一つの事業ともいっていい札幌遠友夜学校が、昭和



(写真2) 半澤洵先生

十九年三月廃校となり、その姿を消したのは、私どもにとってはほんとうに残念なことでした。」と。

また、長男の半澤道郎先生（北海道大学農学部名誉教授）は以下のように記述している。

「夜学校の廃校は父に大きなショックと失望を与えたようでしたが、校舎の跡に市の勤労青少年ホームができ、その中に記念室ができることになった時には本当に喜んでおりました。新渡戸博士顕彰碑の完成を見ることなく昭和47年に亡くなりましたが、父が社会事業に尽くした半生は、新渡戸先生の遠友夜学校精神の実践であったとつくづく思われます。：（中略）：一昨年（一九七九年＝昭和54年）の一月二三日に新渡戸稲造博士顕彰会が、先生の顕彰碑を勤労青少年ホームの前庭に建立して除幕式が行われましたが、生憎新渡戸先生のご遺族が来札されなかつたので、私の孫娘の斎藤絵奈が代わって除幕をする光栄に浴しました。」

四、おわりに

中学（S31）から大学院まで札幌で過ごした筆者は、昨年（二〇二二年）一〇月、北大正門から歩いて新渡戸記念公園を訪れ、顕彰碑の前にしばし佇み、遠友夜学校のことを思いを馳せた。遠友夜学校の活動は、新渡戸の理想の実践であり、教育の機会が得られないままに人生を過ごす可能性のあった数千の人材を育成し、教師として奉仕した数百名の札幌農学校生・北大生に人生行路における意味深い知識や経験を与えた五〇年に及ぶ先駆的な社会福祉活動であった。札幌農学校生るときから教師として奉仕し、代表となつてからは運営責任を協力者とともに二〇年以上にわたつて担われた半澤先生

の尽力・貢献は計り知れないほど大きいことは言うまでもない。しかしながら、半澤先生に関する資料は断片的なものが多く、研究畑の側の人を書いたものは見当たらなかつた。そこで、半澤先生の拓かれた応用菌学講座において大学院まで薫陶を受けた筆者が書かせていただいた。二代目教授の佐々木先生からの伝聞（如是我聞）や今回の調査を通じて、半澤先生のノブレス・オブリージュ（ひげらかさない慈悲深さ、誠実さ、責任感）を遠友夜学校運営においても研究展開においても如実に感ずることができた。本稿を通じてそれらのことを理解していただければ幸いである。

そして、新渡戸精神を今の社会に再び花開かせようとして「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」が札幌の地に生まれ、活動している。「考える会」が「実践する会」に発展することを願ってやまない。

〈謝辞〉

恩師の佐々木西二先生の遺稿「酉のたわごと」および手記に加えて貴重な情報を提供いただいた佐々木民彦氏に厚く感謝申し上げます。また、執筆の機会を与えてくださった藤井茂新渡戸基金理事長に感謝申し上げます。

参考資料

- ・札幌市教育委員会編：「遠友夜学校」さっぽろ文庫18（昭和56年）
- ・半澤久：「半澤洵先生小伝 抜粋特別号」北海道大学総合博物館ポランティアニュース（二〇二〇年二月）
- ・札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編：「思い出の遠友夜学校」（一九九五年）北海道新聞社
- ・三上節子：札幌遠友夜学校の誕生と発展——それを支えたものは何か——基督教学第五二号：118（二〇一七）北海道基督教学会
- ・三上節子：札幌遠友夜学校の誕生と貢献 新渡戸稲造の世界第二三三号（二〇一四年）（二財）新渡戸基金
- ・原田昭子：「札幌遠友夜学校のあゆみ」 http://nitobe-enyu.org/ronbun_harada01/（二〇一八年）
- ・東京パストゥール会：「縁の下の力持ち 佐々木西二先生を偲んで」（一九九八年）
- ・堀田国元：近代納豆の幕開け 化学と生物49（一）（二〇一一年）日本農芸化学会
- ・北海道大学文学書館：https://costep.open.ed.hokudai.ac.jp/like_hokudai/article/83_#10 納豆博士のオルガン——さくら Hokudai—COSTEP
- ・堀田国元：札幌遠友夜学校の校章・校旗と佐々木西二先生「新渡戸稲造の世界」第二九号、五十一頁（二〇二〇年）
- ・Waksman,S.A.: Principles of Soil Microbiology. pp.119, 238, 575 & 580 (1927) Williams and Wilkins.